

令和八年度
座間市福祉推進作文・標語
入賞作品集

令和八年度座間市福祉推進作文・標語入賞作品集

目次

福祉推進作文

【小学校3・4年生の部 最優秀賞】

盲導犬について

ひばりが丘小学校4年 佐藤 藍 4

【小学校5・6年生の部 最優秀賞】

姉が教えてくれた福祉

相模野小学校5年 落水 陽香 2

【中学生の部 最優秀賞】

美しいパズルの中で生きる

栗原中学校2年 ボイキン ケイリー 6

【小学校1・2年生の部 優秀賞】

ふくしのべんきょうをして

入谷小学校2年 原子 笑舞 9

【小学校3・4年生の部 優秀賞】

自分の後かい

相武台東小学校4年 久保田 園子 10

【小学校3・4年生の部 優秀賞】

こんどこそゆう気をだして

東原小学校4年 川瀬 裕太 12

【小学校5・6年生の部 優秀賞】

助けがいない不自由な人

東原小学校 6 年 住吉 春花13

【小学校5・6年生の部 優秀賞】

他の人の立場から

東原小学校 6 年 茂原 咲花15

【中学生の部 優秀賞】

『見えない優しさ』

西中学校 2 年 成瀬 隼一17

【中学生の部 優秀賞】

本当の「平等」とは

栗原中学校 2 年 飯田 悠桜20

【小学校1・2年生の部 佳作】

しょうがいしゃについてのせつめい

入谷小学校 2 年 小屋 史佳23

【小学校3・4年生の部 佳作】

私の持つ声

相武台東小学校 4 年 近藤 碧乃25

【小学校3・4年生の部 佳作】

自然な優しさで

ひばりが丘小学校 4 年 岡本 樹奈27

【小学校3・4年生の部 佳作】

すてきなマーク

中原小学校 4 年 石澤 橙佳29

【小学校3・4年生の部 佳作】

福祉っていいな

中原小学校 4 年 武本 葵30

【小学校5・6年生の部 佳作】

私がモヤモヤしたこと

相模野小学校 6 年 田中 零31

【小学校5・6年生の部 佳作】

病と福祉

相武台東小学校 6 年 鹿原 愛莉32

【小学校5・6年生の部 佳作】

わたしにできる事

ひばりが丘小学校 5 年 井上 チャモーディ音桜34

【小学校5・6年生の部 佳作】

誰かの「困った」を解決する工夫

立野台小学校 6 年 青木 舞里36

【中学生の部 佳作】

助け合いとは

栗原中学校 2 年 大井 綾乃37

【中学生の部 佳作】

骨折から気づいたこと

栗原中学校 2 年 塩路 彩香39

【中学生の部 佳作】

電車で見つけた小さな配慮

栗原中学校 2 年 和田 星41

福祉推進標語

【最優秀賞】

ふ く し
不安ごと 苦しまないで 市に相談

東原在住 レスコ 千尋44

【優秀賞】

幸せに 暮らせる言葉 『思いやり』

入谷小学校 5 年 下田 千代44

「どうしましたか？」 笑顔で声掛け 広がる福祉

東原在住 山田 千登勢44

【佳作】

人々が 支え合うたび 福が寄る

座間小学校 6 年 落合 颯汰44

伸ばす手と 思う心で 繋がる輪

西中学校 2 年 岩佐 和花44

手を出せば その手が誰れかの役に立つ

未来へ続け福祉の座間

新田宿在住 岩堀 多起子44

大丈夫 みんなで子育て 見守るよ

さがみ野在住 花泉 麗44

※ 敬称略

※ 作品は、原則として原文のまま掲載しています。

福祉推進作文

【小学校5・6年生の部 最優秀賞】

姉が教えてくれた福祉

相模野小学校5年 おちみず落水 はるか陽香

学校の道徳の授業で「福祉」について学んだ時、私は少し不思議な気持ちになった。教科書には、障害のある人を「手助けしよう」「優しく接しよう」ときれいな言葉で書かれていたからだ。私には、最重度知的障害のある姉がいる。私にとって福祉とは、道徳の時間に習うような特別なことではなく、生まれたときからそこにある、「日常」そのものだ。障害のある姉と、その「きょうだい児」として育った私。私たちの生活の中にこそ、本当の福祉のヒントがあると思っている。

姉は言葉を話すことができない。そのため、何を考えているのか分からず、家族で困ってしまうこともあるし、時には「もう、うるさいな！」と私がイライラしてしまうこともある。決して毎日がきれいごとだけではない。しかし、姉との生活は大変なことばかりでもない。姉は大好きな音楽が流れると、言葉はなくても嬉しそうに両手をパタパタさせて喜ぶ。そのクシャッとした満面の笑みを見ると、家族みんなが自然と笑顔になる。姉は私たち家族にとって、かけがえのない大切な存在だ。

ただ、姉と街へ出かけると、すれ違う人が姉をジロジロと見てきたり、避けるような態度をとったりすることがある。「きょうだい児」である私は、その視線にいつもモヤモヤを感じてきた。世間の人々は、障害のある人を「自分たちとは違うかわいそうな存在」として遠ざけているように思えてならない。しかし、姉も私たちと同じように、毎日

を一生懸命に生きている一人の人間だ。

本当の福祉とは、障害のある人を特別扱いして優しくすることではない。姉のような人が、当たり前前に街を歩き、周囲もそれを「普通の景色」として受け入れる社会のことだ。まず私が姉の最高の理解者であり続けること。そして、誰もがそのままでの姿で生きていける優しい社会を、今度は私が作っていきたい。

【小学校3・4年生の部 最優秀賞】

盲導犬について

ひばりが丘小学校4年 ^{さとう}佐藤 ^{あい}藍

盲導犬は、目の見えない人、見えにくい人が安全に街を歩けるようサポートする犬です。

盲導犬の一日は、まず排泄から始まります。次に食事を摂り、ハーネスをつけて外に行き、障害物があることをユーザーに伝達し、帰宅後はリラックスして過ごします。

一日の仕事時間は全体の二～三割程度です。役割は、「目的地までの道案内」ではなく、「安全に歩くための補助」です。

盲導犬は、視覚障がいのある方が安全に歩けるよう、角、段差、障害物を教え、目的地まで誘導するサポートを行います。

みなさん、もし盲導犬を見かけたら、声をかける、触る、食べ物の与える、じっと見る、許可なく撮影する。の5つの行動はぜったいにやらないでください。盲導犬の集中力を切らせてしまいます。もしユーザーが立ち止まっていたりしたら、ユーザー本人に声をかけてください。「何かお手伝いしましょうか?」「どちらに行かれますか?」などと声をかけるのが適切なサポートだと思います。

私が盲導犬の事をやって、盲導犬は、場所につくまでのサポートだけじゃなく、他にも色々とお仕事をやっているんだなっと思いました。私は、パピーウォーカーのけいけんも一度あり、私たちは黒色のラブラドル・レトリバーを一年間あずかる事になりました。

パピーウォーカーとは、生まれて2か月3か月ほどのラ

ブラドール・レトリバーを1年ほどくん練しさんに言われた通りし育するボランティアです。

私がパピーウォーカーをやって、盲導犬になるための道がそうかんたんではないんだな。と思ったり、盲導犬の入れる店などが少ない事を知って、これからもっと多くして行って、いつかはすべての店に盲導犬が入れるようになってほしいな。と思いました。

【中学生の部 最優秀賞】

美しいパズルの中で生きる

栗原中学校 2 年 ボイキン ケイリー

私は、自分の家族のことを説明するのが、少し苦手です。話したときの相手の反応に、戸惑ってしまうことがあるからです。「福祉」という言葉から、多くのお年寄りの世話や困っている人を助けることを思い浮かべるかもしれませんが、しかし、福祉の根底にあるのは、「人を大切にする」という思いです。そのためには、その人が育ってきた環境や家族の形を、そのまま「当たり前」として受け入れることが大切だと、私は考えます。

アメリカで育った私は、学校でのある光景を今でも鮮明に覚えています。先生が「兄弟はいますか」と聞いたとき、一人の子が「養子の弟がいるよ」と答えました。すると隣の子も「私はお父さんが違うお姉ちゃんがいる」と明るく話しました。ほかにも、宗教の違う子、移民の子、障害のある家族がいる子、ひとり親の子など、それぞれが自分の家族について自然に話していました。そして、それを聞く周りの子どもたちも驚くことはありませんでした。

そんな空気の中で、私は一度も「自分は周りとは違う」と不安になることはありませんでした。さまざまな背景を持つクラスメイトは、一見バラバラのパズルのピースのようでしたが、お互いを理解し、友情を育んでいく様子は、新しく形づくられていく「美しいパズル」のようでした。

私にとって家族とは、単なる「血のつながり」だけを意味するものではありません。国境を越えていても、名字が違っていても、一緒に笑い、泣き、支え合う存在です。

「お父さんとお母さんと子ども」という形だけが正解ではなく、愛や経験を共有する結びつきこそが家族なのだと信じています。

しかし、日本で暮らすようになってから、この考え方は少し「変わっている」と受け取られることに気づきました。ブレンド家族である自分の家族について話すと、相手が戸惑った表情を見せたり、同情するような視線を向けられたりすることがあります。やがて私は、何度も説明することや相手の反応を見ることに疲れ、「年上の兄弟がいます」とだけ言って話を終わらせるようになりました。本当の家族の姿を隠さなければならないことに、寂しさを感じるようになったのです。

この経験を通して、私は「福祉」の本当の意味について考えるようになりました。どれだけ誰かに優しく接していても、その人の生きてきた背景や家族の形を否定してしまえば、それは本当の優しさとは言えません。

これからの社会に必要な福祉とは、自分の家族や生き方について言い訳をしなくていい社会だと思います。「離婚」や「養子」という言葉を聞いても特別なものとして扱われず、ただ「そうなんだね」と受け止められる社会です。家族の形が教科書と違っていても、誰もが尊重されることが、本当の幸せにつながるはずです。

私は、自分の「複雑で、でも温かい」家族を誇りに思っています。だからこそ、同じように悩んでいる人に「そのままで大丈夫だよ」と伝えられる人になりたいです。教科書どおりでない経験こそが、人の優しさを育てるのだと信じています。私の夢は、アメリカの学校で感じたように、バラバラな違いが集まって「美しいパズル」になる社会をつくることです。そして、一人ひとりの違いが重なり合い、

自然に響き合う「ハーモニー」のような関係を広げていきたいです。様々な形の家族がいることが「当たり前」になり、自分の家族のことを隠さなくてもいい社会を実現していきたいです。

【小学校1・2年生の部 優秀賞】

ふくしのべんきょうをして

入谷小学校2年 ^{はらこ}原子 ^{えま}笑舞

今日はふくしについてべんきょうしました。しょうがいしゃのなかには、足のふじゆうな人や、目が見えない人など、いろいろなしょうがいをもった人がくらしていることがわかりました。

いつも気にしないでのっていたエレベーターは、しょうがいをもった人やにんぷさんやベビーカーなど本とうにひつような人がのるのがいいと思いました。ひつようのない人もエレベーターにのってしまうと、ぎゅうぎゅうになってみんなもこまるし、しょうがいをもった人もこまるかもしれません。あんまりのらないことを、ずっとわすれないようにしたいです。

これからは、まえよりも人にやさしく、人の気持ちを考えていき、いろいろくふうしたいです。そうすれば、みんなもいいと思ってまねをして、しょうがいをもった人たちの力になろうと思う人がいるかもしれません。しょうがいをもった人たちがすこしずつらくになったらいいなと思います。

もし、じぶんがしょうがいしゃになったら、とおらせてもらったり、みんなにやさしくしてもらったりして、おたがいにうれしい気持ちになると思います。そしたら、

「ありがとう。」

のあいことばを言って、みんながえがおですごせると思います。

【小学校3・4年生の部 優秀賞】

自分の後かい

相武台東小学校 4 年 ^{くぼた}久保田 ^{そのこ}園子

私が、お母さんとお父さんとお出かけのかえりにおじいさんが具合が悪そうにおなかをかかえてすわりこんでいました。お母さんとお父さんが話かけると、「バスに乗りおくれた。」と言っていました。

その後、もっと具合が悪くなって、ねころんでしまったのでお母さんとお父さんがきゅう急車をよびました。

その時、私は何もできませんでした。

それをきっかけに今はおじいさんがお店でお金やレシートをさいふからおとしてしまった時こしをまげるのはつらいかもしれないし、いたいかもしれないから、自分から近くに行き、ひろって、わたしています。その時に、「ありがとう。たすかったよ。」

と言ってもらい、うれしくなりました。

その言葉を言ってもらった時に私は何もできなかった時の自分の後かいがなくなったように、すっきりして自分は気持ちよくなりました。たぶんおじいさんもあたたかい気持ちになったのではないのでしょうか。それを考えた私は、帰り道に「いいことしたな、これをたくさんつづけたいな。」と、ルンルンでかえることができたのです。

その日からまわりをキョロキョロ見ながら公園、お店、歩道などいろいろな所を見ました。

時には何もできなかった自分のことを思いだすときもあるけど、それをわすれるぐらいたくさんの人にあたたかい

気持ちをとどけてみます。

そして、大人になってもあたたかい気持ちをとどけて、お母さんやお父さんみたいにこまっている人に声をかけて少しでもいいから助けることができればいいです。このことを十年、二十年、三十年とずっと続けていけるようにまい日こまっている人をさがしたり助けたるすることを意しきしてすごしたいです。

【小学校3・4年生の部 優秀賞】

こんどこそゆう気をだして

東原小学校 4 年 ^{かわせ}川瀬 ^{ゆうた}裕太

冬休み、ぼくは、おばあちゃんちにとまりに行くために、バスに乗った。

バスの席にすわっていたら、おばあちゃんより、もっと高れいのおばあちゃんがバスに乗ってきた。ぼくは、その人に席をゆずってあげようと思った。でも、ゆう気がだせなくて、「子どもだからいいよって言われるかな。」「本当はすわりたくないのかな。」「だれかがかわってくれるかな。」などと思って、声をかけられなかった。けっきょく席をゆずれなくて、ぼくは、ゆう気をだせなかったことをとてもこうかいした。

家に帰って、このことをお母さんに話したら、「次は、ヘルプマークをつけている人やつえをついてる人、けがをしている人がいたら、かわってあげたほうがいいよ。」と教えてもらった。

さらに、この間、道とくの学習で本当の親切について勉強した。本当の親切とは、相手の気持ちを考えて行動することだと知った。だから、高れい者だから、しょうがいをもつ人だからと、すぐに助けるのではなくて、相手がどうしたいのか、相手の気持ちをたずねてから行動することが大切だなと思った。

次、バスや電車にのる機会があったら、お母さんに教えてもらったことや道とくで勉強したことを生かして、ゆう気をだして行動していきたいです。

【小学校5・6年生の部 優秀賞】

助けがいない不自由な人

東原小学校 6 年 ^{すみよし}住吉 ^{はるか}春花

私はようちえん年少、年中の時にイスにあごをつよく打って、血が出ました。病院に行ってぬった事があります。私のように辛い思いをした人がいるかもしれません。私の話をもとに、しらべました。

私は、あやまってあごをイスにぶつけてしまいました。その時に友達が協力して先生をよんだりティッシュでおさえたり…と色々な事をしてくれました。その後病院に行き、あごをぬいました。私は福祉は、

「助ける」「支え合う」

と考えていました。でも、

「その気持ちだけで大丈夫だよ」

と言っていた、車いすのおじさんを思い出しました。そのおじさんは坂道をのぼっていました。私は

「助けたい」

と思いました。でも、助ける勇気がありませんでした。遠くから見守っていると、通りかかったお姉さんが、

「大丈夫ですか？何かお手伝い出来ることはありませんか？」

と声をかけていました。その時におじさんはさっきの言葉を言いました。そこで私は何かあればいつも動ける距離で見守るという心のよゆうも必要だな、と考えました。断られた時は、その気持ちに応えて

「お気を付けて」

と笑顔で見送ってあげるのも大切だな、と思いました。お姉さんは、

「無理をせずに、お気を付けて」

と見送っていました。それをみて、

「かっこいいな」「助ける、福祉ってすてきだな」

と思いました。

私は、断られたら、それに従って、お願いされたら手伝う、ということも大切だ、と思いました。これからも福祉を学びたいです。

【小学校5・6年生の部 優秀賞】

他の人の立場から

東原小学校6年 ^{もはら}茂原 ^{えみか}咲花

私には七十代のおじいちゃんがあります。おじいちゃんにはひざをいためていて、階段を下りるのも辛そうにしています。

そんなおじいちゃんとは出かけている時、急な階段があり、私は転ばないかなと不安になりましたが、近くにスロープがあったので、無事下りることができました。

また別の日、私と母で買い物に行くと、入り口に車いすが置いてあったり、トイレにはゆうせんトイレやおむつ替え室などの設備があったりすることに気がつきました。そのとき私は、自分の生活ではあまり気につけないけれど、これらを使う人はきっとすごく助かっているんだと思い、お母さんに聞いてみると、

「自分の身になってから気づくことが多いよね。私も赤ちゃんがいる時はすごく大変だったけれど、出先でも赤ちゃんのためのいろいろな設備があったから安心して出かけられたんだ。」

とっていました。私はこの言葉を聞いて、これらの設備を設計した人も、他の人の立場になって設計したのかなと思いました。

このように他の人の立場になってみると、今まで見えなかったことが見えてくるようになります。

だから私は、他の人の立場になって気持ちを考えられる人がもっと増えて、全員が安心して過ごせる世の中になっ

たらしいなと思いました。

【中学生の部 優秀賞】

『見えない優しさ』

西中学校 2 年 ^{なるせ}成瀬 ^{はやと}隼一

ぼくは、「福祉」という言葉を聞くと、昔はお年寄りや体の不自由な人を助けることだと思っていました。でも今は、それだけではないと感じています。福祉とは、困っている人を社会みんなで支え合うことだと思います。そして、その支えは目には見えにくくても、人の心や生活を大きく助けているのだと感じています。

ぼくの母は、ぼくが小学生のころに病気になりました。最初は入院して治療をしていましたが、だんだん家で過ごす時間が増え、最後の数か月は訪問看護を受けながら自宅で生活していました。母は薬の副作用で、最後のころはうまく話せなくなっていました。それでも訪問看護師さんたちは、母の小さな表情や動きから気持ちを理解しようとしてくれていました。

そのころのぼくは、まだ福祉について深く考えたことはありませんでした。でも今思えば、ぼくたち家族は多くの人に支えられていたのだと思います。病院の先生、訪問看護師さん、学校の先生、周りの人たち。たくさんの人が母や家族のことを気にかけてくれていました。

母が亡くなった後も、その支えは続いています。ぼくの家は今、ひとり親家庭です。生活の中には大変なこともあります。でも、医療費の支援制度や、母が生前に年金を払ってくれていたことで受け取ることができる遺族年金など、社会の制度に助けられています。ぼくは以前、そういう制

度は自分には関係ないと思っていました。しかし実際には、その支えがあることで、今の生活が成り立っているのだと感じています。

また、人のやさしさにも何度も助けられてきました。学校の先生たちは、母が亡くなったあとに家へ来て、お焼香をあげてくれました。さらに、小学校時代の野球チームの監督も来てくださり、ぼくたち家族に声をかけてくれました。その姿を見て、ぼくは本当に気にかけてくれている人がいるのだと感じました。何気ない言葉や行動でも、人の心を支える力があるのだと思いました。

さらに、ぼくが所属している野球チームの存在も大きな支えです。野球をしている時間は、つらいことを少し忘れることができます。仲間や監督、コーチのみなさんが声をかけてくれたり、いつも通り接してくれたりしたことに救われました。ぼくは、ただ野球を教えてもらっているだけではなく、人とのつながりにも支えられているのだと思います。

ぼくは以前、福祉とは特別な人がする特別なことだと思っていました。でも今は違います。困っている人を支える制度も福祉ですし、相手を思いやる気持ちも福祉なのだと思います。誰かに声をかけること、そばにいて、安心させること。そんな小さな行動も、人を支える大切な力になるのだと知りました。

人は、一人では生きていけません。苦しいとき、悲しいとき、周りの支えがあることで前を向くことができます。ぼく自身、多くの人や制度に助けられてきました。だからこそ、これからは自分も、困っている人に自然と手を差し伸べられる人になりたいです。

そして、母を支えてくれた人たちや、今のぼくたち家族を支えてくれている人たちへの感謝を忘れずに生きていきたいと思います。

【中学生の部 優秀賞】

本当の「平等」とは

栗原中学校 2 年 ^{いいだ}飯田 ^{ゆら}悠桜

いきなりですが、あなたは障害についてどのように考えていますか。今は健康だから関係ない、障害のある人に対して苦手意識を持ってしまう、そう感じている人もいるかもしれません。しかし、障害は誰もが望んでなるものではなく、ある日突然、身体や心に不自由を抱えることもあります。事故や病気など、予想できない出来事によって、誰にでも起こり得ることです。つまり、それは決して他人事ではなく、私たち一人ひとりに関わる問題なのです。

私は以前、何気ない会話の中で、人を見ためや違いでからかうような言葉が使われているのを耳にしました。その場では周りも笑っていて、私は違和感を覚えながらも、何も言うことができませんでした。空気を壊すのが怖くて、ただ流してしまったのです。しかし、そのときの光景は頭から離れず、

「あのとき何か一言でも言えたのではないか」と何度も考えました。そして、自分もその場の雰囲気流されてしまった一人なのだと気づき、強い後悔を感じました。

私の親は、障がいのある人を支える福祉の仕事をしているだけでなく、障がいのある人たちによる演劇団も運営しています。私は物心がつく前からその活動を見たり、参加していた為、障がいのある人と関わることは特別なことではなく、私にとっては当たり前の日常でした。演劇の練習では、それぞれが自分の役に真剣に向き合い、ときにはう

まくいかず悩みながらも、仲間と協力して一つの作品を作りあげていました。舞台に立ったときの生き生きとした表情や、観客に伝えようとする姿勢はとても印象的で、何度も心を動かされました。その姿を見て、好きなことに取り組む気持ちや誰かに何かを伝えたいという思いに、障害があるかどうかは関係ないのだと強く感じました。

しかし、学校で差別的な言葉を耳にしたとき、私にとって当たり前だったその考えが社会では必ずしも当たり前ではないのだと気づかされました。人は皆平等であると頭では分かっていたはずなのに、私はそれを行動に移すことができていなかったのです。

「おかしい」と思いながらも何も言えなかった自分は本当に平等を大切にしていると言えるのか、深く考えるようになりました。

平等とは、ただ同じように考えることや、心の中で「大切」と思うだけでは不十分なのではないでしょうか。日常の中で誰かを傷つける言葉に気づき、それに向き合い、ときには勇気を出して声をあげること。その小さな行動の積み重ねこそが、本当の意味での平等につながるのだと思います。たとえ大きなことができなくても、

「それは違うと思う」と伝えることや、傷ついている人に寄り添うことは、誰にでもできる大切な行動だと私は思います。

福祉とは、特別な支援を必要とする人だけの事ではなく、誰もが安心してすごせる社会をつくるための考えだと思います。そのためには、一人ひとりが自分の言動を見つめ直し、相手の立場に立って考えることが必要です。私自身、あのとき何も言えなかった経験を無駄にせず、これからは

同じような場面に出会ったとき、自分にできる形で行動したいと考えています。

私はこれから見て見ぬふりをするのではなく、小さな事でも声を上げられる人でありたいと思います。そして、一人ひとりが互いの違いを認め合い、安心してすごせる社会に少しでも近づけるよう、自分の行動を大切にしていきたいと考えます。私は本当の意味で

「平等」と言える社会を目指して、日々意識し続けていこうと思います。

【小学校1・2年生の部 佳作】

しょうがいしゃについてのせつめい

入谷小学校2年 小屋^{こや} 史佳^{ふみか}

二じかんめにしょうがいしゃについてべんきょうをしました。しょうがいしゃの人がたくさんいることをしりました。中にはしんぞうがふじゆうな人がいてその人の近くではけいたいをさわってはいけないことをしりました。今日のべんきょうでしょうがいしゃは、からだがふじゆうな人だとはじめてしりました。もともとてん字ブロックがせかいのみんなをまもるためのものだとしていたけど、目がふじゆうな人にもやくに立つものだとはじめてしりました。

これからしょうがいしゃのような人を見つけたら、すぐにどうすればいいかを考えて行どうします。たとえば、車いすにのっている人がエレベーターのところでこまっていたらゆずってあげようと思います。目がふじゆうな人が白じょうをついているのを見つけて、てん字ブロックのところになにかものがおいてあったら、そのものをどかすようにします。目がふじゆうな人がもうどう犬をつれていたら、あるいているばしょをよけてあげます。しんぞうにペースメーカーをつけていて、ヘルプマークをぶらさげていたら、その人の近くでけいたいをさわらないようにします。しょうがいしゃの人がでん車にのってきたら、じぶんがすわっていたせきをゆずってあげるようにします。どこかがふじゆうな人がにもつをおとしたり、こまっていたりしたらじぶんができるだけてつだってあげようと思います。耳がふじゆうでほちょうきをつけている人がいてその人と、もし

話すときにはその人が聞こえやすい声で話をしようと思います。足がふじゆうな人の近くではしらないようにします。もしぶつかっちゃったときにすごくあぶないからです。

【小学校3・4年生の部 佳作】

私の持つ声

相武台東小学校4年 こんどう 近藤 あおの 碧乃

私のおばあちゃん、おじいちゃんは少し不自由な所があります。まず、おばあちゃんは病気をされていて、家で一度たおれてしまって病院で手じゅつをしたことがあります。そして手を動かすときも手がプルプルと動いてしまってあまりせん細な作業をするのがむずかしく、ゆっくりとしか動かせません。そのお話をおばあちゃんが私にしてくれました。

おじいちゃんは足こしが弱くゆっくりと歩いたとしても歩くと足が痛くなるそうです。

この話を聞いて、私が思ういい世界は、どんなに体が不自由でも、どんなにしょうがいがあっても自分ではたらくことができて、自分で好きな場所ではたらけるびょうどうな世界でみんなが幸せになれるような世界がいいと思います。

体が不自由、しょうがい以外にも目が見えない人やにんぷさん、耳が聞こえない人達などにもうれしくかんたんに外に出られるようなしせつやせつびがたくさんできるようにしてほしいとも思います。もちろんふつうにくらしている人達のふたんもへらしてほしいと思いますが、不自由な人達の方が困っていると私は思うので不自由な人達のふたんに先に国や地いきに一番に真っ先に助けてほしいと思います。

不自由な人達を助けてくれるせつびの中でも私は一緒に

はたらいてくれる機械や悩みの相談を聞いてくれる人または機械などがあるとさらにはたらく事が好きになったり、自分で好きな場所に行きやすくなると思いました。なぜなら自分の不自由な所を人に助けてもらうんじゃなくて、自分の不自由な所を自分でおぎなえるからやる気がわいてくると思ったからです。そして私の声が誰かの助けをもとめる小さなその声がどんなに小さくても、私達が気づいて私達の声と一緒に大きな声で助けを呼んでくれる声へと進化させたいです。

【小学校3・4年生の部 佳作】

自然な優しさで

ひばりが丘小学校4年 おかもと 岡本 じゅな 樹奈

去年、私の弟の足がはれて入院してしまいました。ちょうど運動会の一ヶ月前ぐらいで、私はすぐ治ると思っていましたが、一ヶ月もの長い期間、学校を休むことになりました。そして運動会には出られませんでした。弟はリレー選手に決まっていたのでとても残念そうでした。運動会の日のために家でもたくさん練習していたので、私もとても残念でした。

弟が入院している間は顔を合わせることがなかったので、いつもの生活が一人になることが多くさびしかったです。でも入院している弟の方がもっと不安なはずだと思いました。なので、お手紙を送ろうと思いましたが、何度も送ったらじゃまになると思い一回だけ足が治ったら一緒に遊ぶねと、お手紙を送りました。でも、今考えるとお手紙以外にももっと他に手伝える事はあったと思います。例えばもっとお見舞いに行けば、もっと喜んでくれたのかななどと考え込んでしまいます。

この経験から、私はこれからは後悔しないように、やって上げることが大事だと思いました。自分がやってもらって嬉しいことなら、きっと相手にも喜んでもらえると思います。でも自分が無理をしたら気をつかわせてしまうかも

しれないので、自然な優しさでみんなが楽しめるように頑張りたいです。

【小学校3・4年生の部 佳作】

すてきなマーク

中原小学校 4 年 ^{いしざわ}石澤 ^{とうか}橙佳

私は、ホテルやゆうえんちに行った時に、エレベーターにマークがついているのを見つけました。

エレベーターには、よく見かけるマークがついていました。ですが、私にはあまり意味が分かりませんでした。しかも、その下にボタンがあり、もっと意味が分からなくなっていました。でも私は、ボタンが二こあるから二回おせて楽しいなと思っていました。その数か月後に、私は四年生になりました。四年になってから、総合で福祉について勉強することになり、福祉のマークについて調べていました。その時に、友だちが、エレベーターについていたマークを調べていました。そして、そのマークのことをよく知りました。なので、私も自分で調べてみることにしました。エレベーターについていたマークの意味は、車いすが使える広いエレベーターやかがみつきのしゅるいが、ゆうせんで来るという意味でした。

私はこんどから体のふじゆうな人がいる時にだけ、ボタンをおすようにしようと思います。そうしないと体のふじゆうな人にめいわくをかけてしまうからです。みなさんも、体のふじゆうな人に自分ができるようなことをしてあげましょう。

【小学校3・4年生の部 佳作】

福祉っていいな

中原小学校 4 年 ^{たけもと}武本 ^{あおい}葵

私は、下校中に車いすのなかまの電動カートを見たことがあります。初めて見たときは、「なぜバイクのような形で電動なのに歩道をはしっているのだろう」と思いました。けど、学校で福祉の動画を見たとき、それも車いすのなかまなことをしました。

その他にもたくさん車いすがあることを、しました。それから、なんとか電動カートの方にあっていたので道をあけてみました。そしたら、へんじをしてくれたので「人を助けるのはこんなにところが温まるのだな。」と思いました。

福祉のマークには国際シンボルマークというマークがありそのマークは「車いすにのった人」がモチーフにされていて、しょうがいのある人がつかいやすいようにくふうしている建物であることを表わす世界共通シンボルマークです。このマークをしってわたしは、世界のどこでも共通していてしょうがい者にやさしいマークだとおもいます。このマークがあるだけで世界がかわるとおもいました。

車いすは、足のふじゆうな人にべんりなものでたいせつなものだとおもいました。

助けるのは助けてもらった人も自分も心があたたかくなるとおもったので、これからも、助け合ってみんなの心のそこからうれしくなれるようなことのできる大人になりたいです。

【小学校 5・6 年生の部 佳作】

私がモヤモヤしたこと

相模野小学校 6 年 ^{たなか} 田中 ^{れい} 澪

私は先日、エレベーターに乗ろうとしている人達を見かけました。エレベーターに乗ろうとしていた人達は、車椅子を使っている人ではなく、階段やエスカレーターよりもはやくて、楽だからという理由だけで乗っている人だとわかりました。エレベーターにはたくさんの人がならんでいて、「本当に困っている人は乗れないな」と思いました。

他にも、エレベーターの鏡を見て、髪の毛をいじっている人を見ました。このようなことをすると車椅子の人が困ってしまいます。エレベーターの鏡は、車椅子の人が後ろを見て、安全に出れるように作られたものです。なので、鏡を塞がないようにすると、不自由な人がよりよく過ごせると思います。

この 2 つのことから、車椅子の人が待たずに安心、安全にエレベーターを使うためには、どうすればいいのかを考えました。

考えた結果、「車椅子の方優先」「困っている人を助けよう」「鏡を塞がないで」というポスターを貼り付けることなどをしたら良いと思います。さらにわかりやすくするためには、外国の人でも読めるよう、英語や中国語、韓国語などで書くと良いと思いました。

困っている人がもっとより良く、安心、安全に生活するためには、一步一步発展を進めて行くことが大切だと思います。

【小学校5・6年生の部 佳作】

病と福祉

相武台東小学校6年 ^{かばら}鹿原 ^{あいり}愛莉

みなさん、「がん」という病気は知っていますか。一度は、ニュースやSNSなどで聞いたことはあると思います。私のお母さんは「肺がん」というがんのうちの一種になってしまいました。そこからふつうに運動する事もむずかしくなっていたため、外出する事は、ほとんどありませんでした。でも、たまにできた外出はこれでもないくらいに楽しかったです。ある日、その外出先の女子トイレでバリアフリーに出会いました。そのトイレには、便器の横にてすりがありました。お母さんはときどき腹部やむねにいたみを感じている様子があったので、手すりを見たときに、「手すりでお母さんの負荷が、減らされる事も福祉につながるのかな？」

こう感じてもっとこんなものが増えて欲しいなと思いました。自分でなくても、誰かが病にかかるということはとても苦つうで、とてもいやです。でも、この小さな手助けが、気持ちや体を楽にできる。ここで、福祉の良さに改めて気づかされました。

福祉には、病だけでなく、高れい者の方や、目や耳にしょう害をもつ方が過ごしやすくなる、ユニバーサルデザイン。他にも様々な形で活やくする。それが福祉です。

私は今、しょう来就きたい仕事の視野に、医者を入れています。お母さんのように、がんになった方、それ以外にも病というものはたくさんそん在します。私も、この悲し

かった経験を活かしてみて、みんなの役に立ってみたいで
す。

【小学校5・6年生の部 佳作】

わたしにできる事

ひばりが丘小学校5年 ^{いのうえ}井上 ^{ね お}チャモーディ音桜

わたしは、あまり福祉について考えた事ありませんでした。しかし、一つ思い当たる事があります。わたしは、一年生の時から、ミュージカルをやっていて年一回老人ホームに行きます。老人ホームには、お年寄りや、目が見えにくい方、耳が聞こえづらい方、歩くのがむずかしくて車いすを利用している方がいました。

わたしたちは、老人ホームで、お話をしたり歌を歌ったり、ダンスをひろうしたりして笑顔を届けています。最後は、お年寄りの方がわかる昔の歌を歌います。昔の歌はかしがむずかしいけど、おじいさんやおばあさん達に昔を思い出して楽しんでもらおうとたくさん練習して覚えました。

耳が聞こえづらい方はよく見てくれ、目が見えにくい方でも歌を聞いたりして、はく手をして楽しんでもくれていました。しょうがいがある方でも、見たり、聞いたり、感じたりして色々な方法で、楽しんでもれていることがわかりました。最後におじいさん、おばあさん達が、たくさんはくしゅをしてくれました。そしてあくしゅをしながら「ありがとう」といってなみだを流して喜んでくれた人もいました。わたしもすごくうれしかったです。

これからも、もっと大切に歌を歌ったり、ダンスをしたりして心をこめて、幸せと笑顔を届けたいと思います。

みんなで手を取り合って、助けあったり、笑い合ったりして、幸せの大きな輪をつくっていったらいいなと思います

す。

【小学校5・6年生の部 佳作】

誰かの「困った」を解決する工夫

立野台小学校6年 ^{あおき}青木 ^{まいり}舞里

「福祉」という言葉を聞いたとき、みなさんは何を思い浮かべるでしょうか。お年寄りのお手伝いをする、車いすの人が通りやすいスロープなど、誰か特定の人のためだけのものではなく、私たち全員が安心して暮らせるようにするための取り組みのすべてが「福祉」なのだと思います。私の身の回りにも、たくさんの福祉が隠れていました。

例えば、駅にあるエレベーターや、歩道にある点字ブロックです。これらは、体が不自由な人のためだけにあるのではなく、ベビーカーを押すお母さんや、重い荷物を持った人など、実は多くの人を助けています。誰かの「困った」を解決する工夫は、結果としてみんなの暮らしを便利で豊かにしているのです。

しかし、設備が整うだけでみんなが幸せになれるわけではありません。大切なのは、私たちの「心」の持ち方です。もし街中で困っている人を見かけたとき、何も言わずに車いすを押したりするのは、相手にとって本当の優しさではないかもしれません。「何かお手伝いできることはありますか？」と一言声をかける、その小さな思いやりが大切です。相手の立場に立ち、何を必要としているかを考えることが、本当の支え合いにつながるのだと学びました。

【中学生の部 佳作】

助け合いとは

栗原中学校 2 年 ^{おい}大井 ^{あやの}綾乃

私には祖母がいます。足が少し不自由で、リハビリに行ったり、つえをついて歩いています。だけど祖母は、いつも私と犬の散歩に行ってくれます。ある日の散歩、あたりは暗くなり始めていて、私は早く帰りたくて、足早に歩いていました。すると、お店の前に座りこんでしまったおばあさんを見つけました。ですが、私は心配より怖いという気持ちが強くあり、そのままとおりすぎようと思いました。すると、祖母は立ちどまり、一人でその人を助すけようとしたのです。私はそれにとってもおどろきました。ですが祖母の力だけではたりなそうだったので私も助けになろうと思い、とりあえず立てるか相手に確認をとるとどうやら本当に立てなかったようで、祖母と二人で手つだうことにしました。しかし、私も祖母も、大人を起すようなことはしたことがなかったし、二人あわせてもたりる力ではありませんでした。なので困まっているとお店の中から人がたくさん助けにきてくれました。ある人は、おばあさんの体をうしろから支えて、優しく起こそうとしていたり、家族の電話番号を聞いてれんらくをとってくれている人。中には、犬をつれたまま、あたふたと慌てていた祖母と私のことにも気をつかい、荷物を持とうとしてくれる人もいました。おばあさんは無事立ちあがることができ、お店の中のいすに座わることができました。

しばらくすると、おばあさんの家族がおばあさんをむかえ

に来ました。おばあさんとその家族はもうしわけなさそうにまわりの人におれいを言っていました。私はそれをうけて、少しほこらしいような、えらい気持ちになりましたが、他の人たちはおれいをうけても、「ふつうのことです。」「大丈夫ですよ。」など、返事をかえしていました。そのことを私はきいていて、ハッと気づかされました。困まっている人がいたら手をかすのは当然のことだということを。それに私は祖母が立ちどまらなかつたら助けるつもりはありませんでした。お店からでてきてくれた人たちは、私たちのことに気がつく、すぐに手を差し伸べてくれたのにです。助け合う、協力するということは、見返りをもとめた行動ではなく、誰かの力になりたいという気持ちが大切なことを学ぶことができました。更に、祖母になぜあの時足をとめたのかときいてみると、つらそうなのが分かったからだといっていました。じっさいにけいけんをしている人にしかわからない苦しみがあることを知りました。これからは私は、自分がけいけんをしていなくても、相手の気持ちに気づくことができる。見返りをもとめない、本当の助け合いができる人間になりたいです。

【中学生の部 佳作】

骨折から気づいたこと

栗原中学校 2 年 ^{しおじ}塩路 ^{あやか}彩香

私はこの前、右手の指を骨折しました。そのとき初めて、普段何気なく使っていた手が使えないという不便さを強く感じました。字を書くことや物を持つことなどが思うようにできず、日常生活の一つ一つがとても大変に感じられました。これまで当たり前できていたことが、急にできなくなることの不自由さを身をもって知りました。

特に困ったのは、細かい作業や力を入れる動きでした。シャーペンを持つだけでも大変で、字を書くのにも時間がかかってしまいました。そのうえ、思うように手を動かせないため、字の形も崩れてしまい、ノートを取るのにも苦労しました。また、食事のときに箸を使うことなど、これまで意識していなかった動作にも時間がかかるようになりました。

さらに、家族や友達に手伝ってもらうことも増えました。これまで自分一人でできていたことができなくなることに、悔しさやもどかしさを感じることもありました。しかしその一方で、周りの人が自然に手を貸してくれたことで、私は多くの人に支えられて生活しているのだということにも気づきました。そして、支え合うことの大切さを改めて実感しました。

この経験から、私は手のない人や手が不自由な人のことを考えるようになりました。私は一時的な骨折でしたが、それでもこれほどの不便さを感じました。そう考えると、

日常的に不自由さを抱えている人は、さらに多くの工夫や努力をして生活しているのだと思います。しかし、大切なのは単に「大変そうだ」と思うことではなく、その人たちが少しでも生活しやすくなるように、周りの環境や人の行動を考えることだと思いました。

例えば、使いやすい道具を工夫することや、誰もが利用しやすい環境を整えることが大切だと思います。また、困っている人に気づいたときに、迷わず自然に手を差し伸べることも重要だと感じました。声をかけるだけでもその人にとって大きな助けになることがあると思います。私自身も、骨折をするまでは、そうしたことに気づけていなかったと思います。

これからは、自分の経験を忘れず、周りの人の様子に目を向け、困っている人に気づける人になりたいです。そして、特別なことではなくても、小さな手助けを沢山できるように行動していきたいと思います。そのような一人一人の意識や行動が、誰もが安心して暮らせる社会につながっていくのではないかと思います。

【中学生の部 佳作】

電車で見つけた小さな配慮

栗原中学校 2 年 ^{わだ}和田 ^{しょう}星

僕はある日、帰りの電車内で、とても印象に残る素敵な出来事に出会いました。その出来事は、「福祉」という言葉に縁がなかった自分に「福祉」とは何かを深く考えさせられるきっかけになりました。

その日は、夕方から夜にかけての車内で、仕事を終えて帰っていると思われる人や学校帰りの学生などの大勢の人で混雑していました。そんな中、赤いヘルプマークをつけた高齢者の女性と付き添いの方が乗ってきました。車内が混んでいたため、二人は離れて座ることになりました。高齢者の女性は僕の近くの席に座り、付き添いの方は反対側の向かい合った席に座りました。座った直後、付き添いの方が高齢者の女性に安心させるような笑顔を向けていたのが、向かい合っていたので分かりました。僕はその様子を見て、「僕がこの席を付き添いの人と替われば、二人は隣同士で座れるのに」と思いました。でも、「席を譲ることはあっても、替わることは見たこともないかな。」「もし声をかけても聞こえなかったら恥ずかしいな。」そんなことを思い、なかなか立ち上がることができませんでした。自分の勇気のなさに少し不甲斐ない気持ちになっていたその時、高齢者の女性の横に座っていた若いお兄さんが、迷いなく立ち上がり、「次で降りるのでどうぞ」と、付き添いの方に声をかけました。二人は隣同士で座れるようになると、安心した表情で会話をしていました。僕

は躊躇することなく席を替わたお兄さんを純粹に格好いいと思いました。

僕はこの出来事を通して、自分とは無縁だと思っていた「福祉」が、実は誰もが不自由なく過ごせるようにするための、身近な「優しさ」でもあることに気づきました。これから高齢者の割合が増えていく中で、大きなプロジェクトや計画を実行することは僕にはできないかもしれないけど、あのお兄さんのような小さな配慮を一人ひとりが積み重ねていけば、誰もが少しでも過ごしやすい世の中に変えていけるはずだと強く思いました。

福祉推進標語

【最優秀賞】

不安^ふごと 苦し^くまないで 市^しに相談

東原在住 レスコ 千^ち尋^{ひろ}

【優秀賞】

幸せに 暮らせる言葉 『思いやり』

入谷小学校 5 年 下^{しもだ}田^{ちよ} 千代

「どうしましたか？」 笑顔で声掛け 広がる福祉

東原在住 や^{やまだ}山^ち田^{とせ} 千登勢

【佳作】

人々が 支え合うたび 福が寄る

座間小学校 6 年 お^{おちあい}落^{そうた}合 颯汰

伸ばす手と 思う心で 繋がる輪

西中学校 2 年 い^{いわさ}岩^の佐^{のか} 和花

手を出せば その手が誰れかの役に立つ

未来へ続け福祉の座間

新田宿在住 い^{いわほり}岩^た堀^き 多^こ起子

大丈夫 みんなで子育て 見守るよ

さがみ野在住 は^{はない}花^{ずみ} 泉^{れい} 麗

令和 8 年 9 月

座間市福祉部地域福祉課 作成